



北京高等教育精品教材

BEIJING GAODENG JIAOYU JINGPIN JIAOCAI

下册

日语 高年级教程

谢为集 主编



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

H36/215

:2

2007

日语高年级教程

(下册)

谢为集 主编



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

日语高年级教程(下册) / 谢为集主编. —北京: 北京大学出版社, 2007.9
ISBN 978-7-301-12419-2

I. 日… II. 谢… III. 日语—高等学校—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2007)第 084001 号

书 名: 日语高年级教程(下册)

著作责任者: 谢为集 主编

责任编辑: 兰 婷

标准书号: ISBN 978-7-301-12419-2/H·1787

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区成府路 205 号 100871

网 址: <http://www.pup.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62765014 出版部 62754962

电子邮箱: zpup@pup.pku.edu.cn

印 刷 者: 河北滦县鑫华书刊印刷厂

经 销 者: 新华书店

787 毫米×1092 毫米 16 开本 18.75 印张 460 千字

2007 年 9 月第 1 版 2007 年 9 月第 1 次印刷

定 价: 40.00 元

未经许可, 不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有, 侵权必究 举报电话: 010-62752024

电子邮箱: fd@pup.pku.edu.cn

编写说明

《日语高年级教程》下册共选入十四篇课文。与上册相比，难度较大提高。课文中除了散文外，还选入了剧本、小说、和歌、俳句、古汉诗、古汉语、日本现代诗歌等，对于提高学习者的综合日语能力有很大帮助。

《日语高年级教程》下册和上册相同，也由课文、词汇表、作者简介、词语解说、练习与思考等部分组成，以利于学习和教学指导。

由于教材的选材广泛，涉及日本社会、经济、政治、文化等诸多方面，为了便于教学，编写组收集了部分相关资料，将其编写成“教学参考手册”，供授课教师参考。如选用此教程进行日语教学，需要“教学参考手册”，请与编者联系（xieweiji@bisu.edu.cn）

谢谢使用此教材。

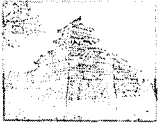
编写组

2007年5月

目 録

第一課	清兵衛と瓢箪	1
第二課	散 髪	12
第三課	木の魅力	21
第四課	玉呑み人形	32
第五課	父帰る	61
第六課	自転車	80
第七課	羅生門	101
第八課	山月記	118
第九課	「見物」の精神	134
第十課	黒い雨	149
第十一課	短 歌	184
第十二課	俳句と川柳	201
第十三課	漢詩・漢文	221
第十四課	現代詩の鑑賞	237
新出語彙総索引		253
参考文献		293

1



志賀直哉

第一課 清兵衛と瓢箪

志賀直哉

これは清兵衛という子どもと瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が切れてしまったが、まもなく清兵衛には瓢箪に代わる物ができた。それは絵を描くことで、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

清兵衛がときどき瓢箪を買ってくることは両親も知っていた。三、四銭から十五銭ぐらいまでの皮つきの瓢箪を十ほども持っていたろう。彼はその口を切ることも種を出すことも独りで上手にやった。栓も自分で作った。最初茶渋で臭味を抜くと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それでしきりに磨いていた。

全く清兵衛の凝りようは烈しかった。ある日彼はやはり瓢箪のことを考え考え浜通りを歩いていると、ふと、目に入った物がある。彼ははっとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出してきた爺さんのはげ頭であった。清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。「りっぱな瓢じゃ。」こう思いながら彼はしばらく気がつかずにいた。——気がついて、さすがに自分で驚いた。その爺さんはいい色をしたはげ頭を振り立てて向こうの横町へ入って行った。清兵衛は急におかしくなって一人大きな声を出して笑った。たまらなくなつて笑いながら彼は半町ほど駆けた。それでもまだ笑いは止まらなかった。

これほどの凝りようだったから、彼は町を歩いていれば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、およそ瓢箪を下げた店といえれば必ずその前に立ってじっと見た。

清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っている。彼は学校から帰って来るとほかの子どもとも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅であぐらをかいて瓢箪の手入れをしていた。手入れがすむと酒を入れて、手拭いで巻いて、缶にしまって、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。翌朝は起きるとすぐ彼は缶を開けてみる。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は飽かずそれを眺めた。それから丁寧に糸をかけて陽のあたる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行った。

清兵衛のいる町は商業地で船着き場で、市にはなっていたが、わりに小さな土地で二十分歩けば細長い市のその長いほうが通り抜けられるくらいであった。だからたとえ瓢箪を売る家はかなり多くあったにしろ、ほとんど毎日それらを見歩いている清兵衛には、おそらくすべての瓢箪は目を通されていたろう。

彼は古瓢にはあまり興味を持たなかった。まだ口も切っていないような皮つきに興味を持っていた。しかも彼の持っているのは、大方いわゆる瓢箪形の、わりに平凡な格好をした物ばかりであった。

「子どもじゃけえ、瓢いうたら、こういうんでなかにゃあ気に入らんもんと見えるけのう。」大工をしている彼の父を訪ねて来た客が、傍で清兵衛が熱心にそれを磨いているのを見ながら、こう言った。彼の父は、

「子どものくせに瓢いじりなぞをしおって……。」とにがにがしそうに、そのほうを顧みた。

「清公。そんなおもしろくないのばかり、えっと持っとってもあかんぜ。もちっと奇抜なんを買わんかいな。」と客が言った。清兵衛は、

「こういうがええんじゃ。」と答えて澄ましていた。

清兵衛の父と客との話は瓢箪のことになっていった。

「この春の品評会に参考品で出ちよった馬琴^{ばきん}の瓢箪というやつはすばらしいもんじゃったのう。」と清兵衛の父が言った。

「えらい大けえ瓢じゃったけのう。」

「大けえし、だいぶ長かった。」

こんな話を聞きながら清兵衛は心で笑っていた。馬琴の瓢というのはそのときの評判な物ではあったが、彼はちょっと見ると、——馬琴という人間も何者だか知らなかったし——すぐくだらない物だと思ってその場を去ってしまった。

「あの瓢はわたしにはおもしろうなかつた。かさばつとるだけじゃ。」彼はこう口を入れた。

それを聴くと彼の父は目を丸くして怒った。

「何じゃ。わかりもせんくせして、黙っとれ！」

清兵衛は黙ってしまった。

ある日清兵衛が裏通りを歩いていて、いつも見なれない場所に、仕舞屋^{したや}の格子先に婆さんが干し柿や蜜柑の店を出して、その背後の格子^{うしろ}に二十ばかりの瓢箪を下げて置くのを発見した。彼はすぐ、

「ちょっと、見せてつかあせえな。」と寄って一つ一つ見た。中に一つ五寸ばかりで一見ごく普通な形をしたので、彼には震いつきたいほどにいいのがあった。

彼は胸をドキドキさせて、

「これ何ぼかいな。」ときいてみた。婆さんは、

「ぼうさんじゃけえ、十銭にまけときやんしょう。」と答えた。彼は息をはずませながら、「そしたら、きっとだれにも売らんといて、つかあせえのう。すぐ銭持って来やんすけえ。」くどく、これを言って走って帰って行った。

まもなく、赤い顔をしてハアハア言いながら帰って来ると、それを受け取ってまた走って帰って行った。

彼はそれから、その瓢が離せなくなった。学校へも持って行くようになった。しまいには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあった。それを受け持ちの教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員はいっそう怒った。

他所から来ている教員にはこの土地の人間が瓢箪などに興味を持

つことが全体気に食わなかったのである。この教員は武士道を言うことの好きな男で、雲右衛門くもえもんが来れば、いつもは通り抜けるさえ恐れている新地の芝居小屋に四日の興行を三日聴きに行くくらいだから、生徒が運動場でそれを唄うことにはそれほど怒らなかったが、清兵衛の瓢箪では声を震わして怒ったのである。「とうてい将来見込みのある人間ではない。」こんなことまで言った。そしてその丹精を凝らした瓢箪はその場で取り上げられてしまった。清兵衛は泣けもしなかった。

彼は青い顔をして家へ帰ると炬燵に入っただだぼんやりとしていた。

そこに本包みを抱えた教員が彼の父を訪ねてやって来た。清兵衛の父は仕事へ出て留守だった。

「こういうことは全体家庭で取り締まっていただくべきで……。」教員はこんなことを言って清兵衛の母に食ってかかった。母はただただ恐縮していた。

清兵衛はその教員の執念深さが急に恐ろしくなって、唇を震わしながら部屋の隅で小さくなっていた。教員のすぐ後ろの柱には手入れのできた瓢箪がたくさん下げてあった。今気がつくか今気がつくかと清兵衛はヒヤヒヤしていた。

さんざん叱言ごごを並べたあと、教員はどうとうその瓢箪には気がつかずに帰って行った。清兵衛はほっと息をついた。清兵衛の母は泣き出した。そしてダラダラとぐちっぽい叱言を言い出した。

まもなく清兵衛の父は仕事場から帰って来た。で、その話を聞くと、急に側にいた清兵衛を捕まえてさんざんになぐりつけた。清兵衛はここでも「将来とても見込みのないやつだ。」と言われた。「もう貴様のようなやつは出て行け。」と言われた。

清兵衛の父はふと柱の瓢箪に気がつく、と、玄能を持って来てそれの一つ一つ割ってしまった。清兵衛はただ青くなって黙っていた。

さて、教員は清兵衛から取り上げた瓢箪をけがれた物でもあるか

のように、捨てるように、年寄った学校の小使いにやってしまった。小使いはそれを持って帰って、くすぶった小さな自分の部屋の柱へ下げておいた。

二か月ほどして小使いはわずかの金に困ったときにふとその瓢箪をいくらでもいいから売ってやろうと思い立って、近所の骨董屋へ持って行って見せた。

骨董屋はためつ、すがめつ、それを見ていたが、急に冷淡な顔をして小使いの前へ押しやると、

「五円やったらもろうとこう。」と言った。

小使いは驚いた。が、賢い男だった。何食わぬ顔をして、

「五円じゃとても離し得やしえんのう。」と答えた。骨董屋は急に十円に上げた。小使いはそれでも承知しなかった。

結局五十円でようやく骨董屋はそれを手に入れた。——小使いは教員からその人の四か月分の月給をただもらったような幸福を心ひそかに喜んだ。が、彼はそのことは教員にはもちろん、清兵衛にもしまいまで全く知らん顔をしていた。だからその瓢箪の行方についてはだれも知る者がなかったのである。

しかしその賢い小使いも骨董屋がその瓢箪を地方の豪家に六百円で売りつけたことまでは想像もできなかった。

……清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これができたときに彼にはもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢を玄能で割ってしまった父を怨む心もなくなっていた。

しかし彼の父はもうそろそろ彼の絵を描くことにも叱言を言い出してきた。

『新国語』1（第一学習社）より

新出語彙

清兵衛 [せいべえ]	(名)	<人名> 清兵卫
瓢箪 [ひょうたん]	(名)	葫芦
茶垢 [ちゃしぶ]	(名)	茶垢
臭味 [くさみ]	(名)	怪味、异味
しきりに	(副)	不间断地
烈しい [はげしい]	(形)	激烈、剧烈
はっと	(副)	吃一惊
ズラリと	(副)	一大排
屋台店 [やたいみせ]	(名)	(饮食等) 小吃摊位
はげ頭 [はげあたま]	(名)	秃顶、秃头
骨董屋 [こっとうや]	(名)	古玩店、古董铺
八百屋 [やおや]	(名)	菜店、菜铺
荒物屋 [あらものや]	(名)	杂货店
駄菓子屋 [だがしや]	(名)	糖果铺
じっと	(副)	一动不动地
炬燵 [こたつ]	(名)	取暖用的桌子
大方 [おおかた]	(副)	大都、几乎都
奇抜 [きばつ]	(形动)	奇异、独特
品評会 [ひんぴょうかい]	(名)	评比会
参考品 [さんこうひん]	(名)	参展品
くだらない	(形)	无意义、没价值
かさばる	(自五)	占地方
裏通り [うらどおり]	(名)	(背街的) 小巷
格子 [こうし]	(名)	格子窗门
干し柿 [ほしがき]	(名)	柿饼
まける	(他下一)	(卖方) 让价
くどい	(形)	纠缠、没完没了
しまい	(名)	最后、到头来

芝居小屋 [しばいごや]	(名)	戏棚
興行 [こうぎょう]	(名)	演出、比赛
丹精 [たんせい]	(名)	精心、尽心尽力
本包み [ほんづつみ]	(名)	(用包袱皮包裹的) 书本包
取り締まる [とりしまる]	(他五)	取締
執念深さ [しゅうねんぶかさ]	(名)	盯上、不放过
ヒヤヒヤ	(副)	提心吊胆
叱言 [こごと]	(名)	数落、埋怨
だらだら	(副)	絮絮叨叨
ぐちっばい	(形)	罗罗嗦嗦
なぐりつける	(他下一)	殴打
貴様 [きさま]	(名)	你这家伙
くすぶる	(自五)	烟熏
ためつすがめつ	(副)	左看右看、仔细观看
押しやる [おしやる]	(他五)	一推
心ひそか [こころひそか]	(形动)	心中暗想
行方 [ゆくえ]	(名)	行踪
豪家 [ごうか]	(名)	豪门
売りつける [うりつける]	(他下一)	推销
怨む [うらむ]	(他五)	怨恨

● 作者について ●

志賀直哉 (しがなおや)

一八八三 (明治一六) ~ 一九七一年 (昭和四六)。小説家。宮城県生まれ。一九一〇年、武者小路実篤 (おしゃのこうじさねあつ)・有島武郎 (ありしまたけお) らと雑誌『白樺 (しらかば)』を創刊した。以後、『網走 (あばしり) まで』などの短編や『大津順吉』などを発表、作家としての地歩を確立する。作品に『城の崎 (きのさき) にて』『暗夜行路』などがある。

● 言葉の解釈

一、縁が切れる

「縁」は、①物の周辺部、②たより、てがかり、関係、③婚姻または肉親の関係、④まわりあわせ、などの意味がある。ここでは②の「関係」の意。

二、皮つきの瓢箪

まだ加工していない瓢箪。

三、口を切る

瓢箪を作るとき、瓢箪の注ぎ口になる部分を切ること。そこから中の種子や実をほじくり出して容器状にする。

四、茶渋

茶を煎じた汁のあか。

五、飲みあました酒

「あます」は、「残す」の意。飲み残した酒。

六、凝りよう

「凝る」は、面白くて夢中になること。「よう」は、「様」で、様子、有様、状態の意。

七、浜通り

一般的に浜（海側）に近い通り。具体的な地名が明記されている訳ではない。

八、半町

一町は約一〇九メートル。

九、専門にそれ売る家

この地方では瓢箪収集が道楽、趣味として流行しており、従って瓢箪だけを専門に商う店も多く見られた。

十、清兵衛のいる町

広島県尾道市がモデルといわれる。（本文中の方言はその地方のもの。）

十一、たとえ瓢箪を売る家はかなり多くあったにしろ

「たとえ……にしろ（＝にせよ）」は、逆接の仮定条件を表す。「にしろ」

は、「としても」「にしても」「にしたって」「にせよ」などとほぼ同じように使われるが、「にしたって」は会話表現になじみやすく、「にせよ」は硬い文章に見られる。

十二、子どもじゃけえ、瓢箪いうたら、こういうんでなかにゃあ気に入らんもんと見えるけのう

「子供だから、瓢箪といえ、こうした（平凡な）ものでなければ気に入らないものと見えるからなあ」という意。

十三、子どものくせに瓢箪いじりなぞをしおって

「子供なのに（老人臭い道楽である）瓢箪などを趣味、遊びとして……」の意。

十四、清公

「公」は、名などの下につけて、親しみまたはさげすみの意を表す。「熊〜」「忠犬ハチ〜」など。

十五、馬琴の瓢箪

「馬琴」は、滝沢馬琴（一七六七〜一八四八）のこと。江戸時代後期の小説家。作品に『南総里見八犬伝』『椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）』などがある。馬琴の瓢箪とは、彼が所有していた由緒ある瓢箪のこと。

十六、仕舞屋

商売をやめた家。または、商家でない普通の家。ここでは後者。

十七、見せてつかあせえな

見せてください。

十八、五寸

一寸は約三センチメートル。

十九、震いつきたいほどにいいのがあった

「震いつく」は、①はなはだしく愛して抱きつく、②くやしきのあまりむしゃぶりつく、の意がある。ここでは①。自分の理想としているものに近い瓢箪を目の前にして、清兵衛が震いつきたいような心の高揚を覚えている様子を表現している。

二十、何ほかいな

いくらですか。

二十一、ぼうさんじゃけえ

お坊っちゃんのことだから。

二十二、きっとだれにも売らんといて、つかあせえのう

絶対誰にも売らずにいてください。

二十三、来やんすけえ

来ますから。

二十四、時間中

授業時間中。

二十五、修身

旧制の小・中学校の授業科目の一つで、国民としての道徳を養うことを目的とした。

二十六、武士道

武士階級に発達した、独特の倫理意識。江戸時代に儒教思想に裏付けられて大成した。忠誠、廉恥、礼儀、質素、儉約、名誉などを重んじる。

二十七、雲右衛門

桃中軒雲右衛門（一八七三～一九一六）。明治、大正期に活躍した浪曲界の先駆者。

二十八、新地

新しく開かれた土地。またはそこにつくられた歓楽街。ここでは後者。

二十九、食ってかかる

激しい口調で反論したり、自分の意見を押し通そうとしたりする。

三十、玄能

大きな金づち。

三十一、小使い

学校用務に従事する職員の旧称。

三十二、くすぶった～

「くすぶる」は、①火がよく燃えないで煙ばかりが出る。②煙の煤で黒くなる。③引きこもって陰気に暮らす。④比喩的に、事件、騒ぎなどが、

完全に解決しないままで、再び問題が起こるような状態である。ここでは②の意味。

三十三、何食わぬ顔

何事も知らぬ顔。

● 練習と思考 ●

一、周囲の大人たちは、清兵衛が瓢箪に熱中していることについてどう思っているか、まとめてみよう。

①父親、②母親、③教員、④父を訪ねて来た客。

二、清兵衛が瓢箪に熱中している様子・程度を示す挿話を本文から抜き出してみよう。

三、清兵衛はどのような少年として描かれているか考えてみよう。

四、作者は、清兵衛にたいしてどういう感情を抱いていると思われるか、考えてみよう。

五、作者がこの作品で言おうとしていることを、次のそれぞれを手がかりに、考えてみよう。

1. 大人たちの描かれ方
2. 大人たちと清兵衛の対照



小説家としての
椎名誠

第二課 散 髪

椎名誠

小説家としての椎名誠

夏は少年にとって大きな脱皮の季節なのだろう。ひと夏を過ぎると、少年はまたひとつ変わっていくのだ。

七月に夏のシベリア横断の旅から帰ってきたあたりで、岳が急に大人びてきているのに気がついた。すでに声変わりし、顔つきになんとはなしの「男の意志」のようなものが現れてきた。一年前の夏、三宅島で釣りをしたときに見た無邪気なあどけなさ、といったものはもうあまり見られなくなっていた。

私が今までずっと風呂場で刈っていた素人床屋をいやがるようになったのはそのシベリアの旅から帰ってすぐのころだった。ボサボサに伸びた頭を見て、私はいつものように「そろそろ頭刈ろうか。」と気軽な感じで言ったのだ。

すると岳は「まだいいよ。」と、私の顔を見ずに言った。

そのときはそれで頭の話はしなかった。二回目は夏休みに入る直前だった。坊主からそのまま三ヶ月間ほど伸ばしっぱなしにしている岳の髪の毛は頭のとっぺんから裾のほうまで同じ長さで伸びてしまっているの、裾の毛が耳に覆いかぶさるほどになっていた。

「さあ、そろそろ頭刈ろう。」

と、私は言った。すると岳はそのときも私の顔を見ずに「まだいいよ。」と言ったのだ。しかしその頭はもうどこから見ても「まだいいよ。」という状態ではなかった。だれが見ても「もうダメだ。」というようなムサクルシイ頭になっていたのである。

「まだいいよじゃないよ。来い。一緒に風呂場に来い！」

と、私はなんだか妙にいら立ちながら、私を見ようとしないうつの顔